

## 発達 7 (244~251)

座長 岡 宏子・末田 啓二

- 244 生後3年間における母子相互交渉—事例分析—  
お茶の水女子大学 藤 崎 真知代他
- 245 乳児期の精神発達と母子関係 (VI)  
聖心女子大学 岡 宏子他
- 246 “ (VII)  
聖心女子大学 白 川 公子他
- 247 “ (VIII)  
聖心女子大学 比留間 敦子他
- 248 “ (IX)  
聖心女子専門学校 大 野 澄子他
- 249 母子相互交渉場面における対応様式の分析  
—その1, 子どもの認知する母親の対応—  
和歌山信愛女子短期大学 末 田 啓二他
- 250 “  
—その2, 母子相互の対応関係—  
和歌山信愛女子短期大学 庄 司 留美子他
- 251 乳幼児期における母性的養育環境と発達への影響  
—乳児院を中心としてII—  
日本総合愛育研究所 萩 原 英敏他

244 中原(茨城大)より, 研究に厳密さは認められるが, 父親との相互関係にふれていないのはなぜかとの疑問に, 藤崎はアンケート調査を実施し, 現在分析中であると答えた。岡は全発表に共通の問題であるかと前おきし, 母子関係研究の諸方法の中でこの方法はどのような位置にあり, 他とどう関係し, どの程度相互フィードバックを考えているのかを質問。高橋(東学大)は, とらえやすい方法を選択, 行動観察より具体的イメージをつかむ。質問紙は補助的に用い, 子どもの年齢が高まるにつれ意識面を重視すると答えた。

245~248 中原より, ①母親の就労実態と家族構成への質問。②人見知りについてはその対象や観察時間により結果が異なるのではとの疑問が示された。岡は, ①家族構造として父母と1~2人の子どもが大部分で類似。就労は外勤, フルタイムである。②項目として問題はあるが1つの発達診断として使用が必要, すべての診断項目は環境差, 質の差をふまえて用いていると答えた。田島(北大)より, 母親は子どもの発達を過大, 過小評価する可能性がある。母以外から発達指標のとり方を考えているかとの問いに, 岡は, 問題は限定観察場面での母親以外の判断にもある。質問の仕方は価値判断や推測を

防ぐ工夫をした。森下(和歌山大)は, 4領域間にかくなる機能連関があるか, 発達連関をどう考えるか, 母親の養育態度がそれにどう関係するかを質問。岡は, 4領域に分け測定したが, 1つの領域には実は他も含んでいる。探索活動には原始的な知的活動が含まれるし, その際働く興味の強さが親との情緒的関わりの多少で変わってくる。今後臨床場面で把握し, 時間的スケールの中で関連の図式化, 法則化に努めたいと回答した。高橋から, 保育園児の選択は少数園に固定したかの問いに, 岡は, 多数園を対象, 1園2~3人, 実施可能な所から選択すると共に園の特殊性の混入を防いだと説明した。

249~250 藤崎より, 二件法による回答の根拠はどの質問に, 末田は小3が対象であり, 3件法では中間スケールの意味理解が困難と答えた。岡は, ①母親の態度に対する幼児の認知との差は前報で捉えたのか, ②幼児の認知の捉え方を何か工夫する予定か, ③母子の認知差の変化として発達を捉えるのか, ④その場合, 場面設定としてFM場面を使うのかを質問。末田は, ①幼児の認知は本質問紙で捉えていない, ②ここで得た知見に基づき幼児にも適用できる質問紙やCCP形式を考案したい, ③母子相互のメカニズムを発達段階別に捉えたい, ④庄司は, 将来は実験観察法も含め, 縦断的に検討したいと回答した。

251 中塚(大分大)は, 担当性の実態について質問。萩原は, 特定の子を中心とした保育であり, 有意差はないがこの方法が発達に有効と回答。高橋は, 在院期間が長いほど発達がよいが, どう解釈するのかと質問。萩原は, 入院直後は評価しにくいことや評定者の願望が影響し, はっきり言えないが, 院での養育によって入院前の状態がかなり回復すると応答。また中原は, ①津守, 稲毛式の尺度の評定での条件統制上の配慮は, ②学校, 施設を通し測定すると評定にバイアスが働くのでは, 体重も大きいかと質問。萩原は, ①保育者の認識レベルの統制はしていない, ②体重に関する評定は多分妥当だろうと回答。大野は, 津守式は0歳の言語理解の項目が粗いがと質問。萩原は, 言語の評定は容易でシビアと考えると回答。森下は, 津守の標準化データは古いが発達加速現象はどうかと質問。萩原は, 知能の加速現象は本施設ではないと回答。庄司は, 入院時体重が36か月児で極端に低いかと質問。萩原は, 対象児が少ない為と考えたいと応答した。

(岡 宏子・末田啓二)